

たのではないだろうか。私たちはマルクス主義に共鳴すると同時に、たまたま自分たちが美校の学生であったところから、いわば便宜的、自動的に美術家同盟に加わりはしたものの、どちらかといえばプロレタリア美術の現実には懐疑的で、だからマルクス主義の運動に身を捧げる気はあっても、メンバーの中にプロレタリア美術の作品に真面目に関心を持っている者は殆どなく、却って、ひそかに不信と軽侮さえ抱いているようであった。」

⑫ 文庫の整備

文庫には本校創立以来作品、図書等の美術資料が蓄積され、収蔵量は膨大になった。その整理の問題は前々から浮上していたが、和田校長は本格的に整理を始めることとし、前出の事務分掌規程改正とともに文庫課を置き、教授矢代幸雄を課長に任命、昭和七年九月十四日の主任、理事会議の席上、次の指示を出した。

本校の文庫は参考品、標本による實物教育を行ひ、又圖書によつて生徒に自主的研究をさせる爲、即ち各教室及學科に於て教授し得ぬものを文庫にて研究させる爲に、學校の教育施設として重視すべきものである。これが爲め従来の文庫掛の位置を高め、本校事務三分課の一とし責任者に教授を任命した。又文庫所管建物の増加修繕を行ひ、特に陳列館別館をも設置したが、尙將來も陳列館増築計畫は學校として重要に考へたい。次に文庫經營上の學校の方針であるが、先づ學校にある標本圖書類を能ふ限り文庫に集中したいと思ふ。標本圖書の分散は研究者にとつて不便なるの

みならず、同じものを二重に購入し制作させたりすることがあり、又管理上にも困難があつた。更に各科に小標本室を作ることによる教室の無駄も多かつたが、文庫を學校全體の標本圖書の保管所となすことによりこれ等の不便困難が除かれる譯である。その爲文庫に命じて、各科に備付の標本圖書類は教材として必要缺くべからざるものに限り、他は文庫に返却せしめる様にした。これにより標本圖書類の各科の奪ひ合ひも避けられるのであらう。又從來各教官に許してゐた標本圖書類の借出は最少限度に止めたい。これが爲め文庫から返却を督促する様嚴重に校長より命令した。教官が多數の借出をなし長期間返却しないことは學校多年の宿弊であつて、生徒の不滿外部の非難も多かつた。この點も將來は單に文庫の督促と思はず學校長の命令として遵守せられたい。最後に文庫の標本圖書購入の方針であるが、これは文庫課によく研究させ、計畫を立て、美術教育上の基本的参考品及圖畫を組織的に購入し取揃へるやうにして、數年の中に完備させたい積りである。斯様にして普通の美術館と異つた美術教育的美術館並に圖書館にして行きたい。これが我が校文庫經營の理想である。

(新「規矩男」筆記)

(『東京美術學校校友會月報』第三十一卷第四号所載「文庫彙報」)

矢代幸雄のもとに文庫整理が行われた頃のことを新規矩男は次のように記している。

東大卒業後の就職先として、私はもちろん美術研究所を希望し

た。この希望を、東大で西洋美術史を教わった団伊能先生から矢代〔幸雄〕先生に話していただいたが、美術研究所には空席がなく、難しいということであった。ところで、私が大学を出た昭和七年の三月には、東京美術学校では、三十三年の長きにわたって校長の任にあった正木直彦先生が勇退され、正木校長に伴って何人かの長老の先生方も退職された。退職教官の中には、木口木版画家として有名な仏語の合田清講師もいた。そして私は、幸運にも、合田氏に代わって美校の仏語講師になることができたのである。これは、ひとえに矢代先生のご推薦があったからであり、また洋画の和田英作先生のお口添えも有力であった由である。同時に、卒業間際に、仏語科高等教員免許の申請に必要な仏文学の単位をぜひとるように、強くすすめてくれた吉川〔逸治〕氏の友情に負うところも大きかった。

昭和七年の六月には、和田先生が美校校長に就任された。事務の部局として経理課、教務課、文庫課ができたのはこの時で、矢代先生は文庫課長を引受けられた。この頃から先生は、従来担任されていた西洋美術史の講義を青山新氏（後の和田新氏）に譲られ、日本・東洋の美術史をお持ちになった。文庫には、図書のかに豊富な美術品のコレクションもあったが、その管理方法がすでに近代的とはいえなくなっていたので、先生は課長として文庫の改革充実をはかる決意をされたようであった。先生の文庫でのお仕事のうち、日本・東洋関係のことは、美術研究所の所員で、美校で東洋文学を講義されていた正木篤三氏——昭和八年以後は現大和文華館長石沢正男氏が代わられた——がお手伝いをし、西

洋関係のことは私がお助けした。文庫の蔵書は、当時和漢書が二万数千冊、洋書が三千数百冊に過ぎなかったが、和漢書はともかくとして、洋書は分類さえよくできていず、目録としては、丸善のアナウンスメントを切ってカードに貼りつけ、間に合わせているというような状態であった。私は図書館学の知識は何一つもっていなかったもので、先生のご指示で、図書分類法、洋書目録法などを先輩から手ほどきを受け、また本を読んで勉強し、簡単なながらも洋書の分類表を作り、またカードの作成を行なった。

文庫改革のことは、このようにして矢代先生の指導によって軌道に乗り、また必要な人員も確保していただいた。しかし先生は、美術の講義のほかに美術研究所主事としての仕事をお持ちになり、またたびたび外国に出かけられるというご多忙さであったので、美校文庫課長の方は、昭和九年から香取秀真先生にお願いされた。しかし石沢氏と私とは、それぞれ標本掛長、図書掛長として、香取先生の下で文庫の仕事を続けた。

〔矢代先生追憶〕『日伊文化研究』第十四号。昭和五十一年三月、日伊協会

⑬ 川端玉章翁記念銅柱の建立

右の件に関して『東京美術学校校友会月報』第三十一卷第二号に次の記述がある。

○川端玉章翁記念銅柱除幕式 明治畫壇の巨匠にして其の門下より多數の秀才を出したる川端玉章翁の畫業を追慕する爲めに、結